

けんぱくものしりシート

すい かん 水 干



体験学習室の

『身に着ける』の

コーナーでは、明

治時代のドレス

や仕事着・大漁

着、女学生の衣

装など、さまざま

な衣服を自由

にためすことが

できます。この中

のひとつ水干は、

平安時代（794年

～1185年）から用

いられた男性の

日常着です。



もともと水干は、水にひたして板に張り、干して乾かした布のことでしたが、

後にはこの布で作られた衣服のことも指すようになりました。はじめは、主に

地位の低い役人などが着た簡単な衣服でしたが、やがては身分や立場を超え

て多くの人々の間に広がり、絹織物などで作られたものが貴族や武士の装

束にもなりました。

すいかん ぶぶん くみひも むす み
 水干は、えりの部分を組紐で結び、身
 につけます。組紐は、絹や綿の細い糸を
 なんぼん くみあ つく ひも
 何本も組合わせて作った紐のことです。



くみひも すいかん そで ちゆうしん めの
 組紐は、水干の袖や中心などの布
 を縫い合わせた部分を結び留めて、
 じょうぶ つか
 丈夫にするときにも使われました。
 むす くみひも あま ぶぶん まる
 結んだ組紐の余った部分はほぐして丸
 ひろ きく はな
 く広げ、菊の花のようにしました。こ
 れをきくとじ
 れを菊綴といいます。



きくとじ じだい やくわり
 菊綴は時代がすすむと、もとの役割はなく
 なり、きぬいと べつ つく むね せなか そで
 絹糸で別に作って胸や背中・袖などに
 かざ
 飾りとして付けるようになりました。

げんだい つた へいあん じだい えまきもの すいかん み だんせい ようす
 現代に伝わる平安時代の絵巻物からは水干を身につけた男性たちの様子を
 し
 知ることができます。同じころ岩手では奥州藤原氏の平泉が栄えていて、
 おな いわて おうしゅうふじわらし ひらいずみ さか
 水干装束に身を包み都市の活気を支えた人々の、絵巻さながらの姿が想像
 すいかんしやうぞく み つつ とし かつき ささひとひと えまき すがた そうぞう
 できます。そんな時代に思いをはせながら、ぜひ水干衣装に袖をとおしてみ
 じだい おも すいかん いしやう そで
 てください。

さんこう 参考 『国史大辞典』 / 『発掘された北の都』 岩手県立博物館 1995年 ほか

「けんぱくものしりシート」の内容は発行当時
 ないよう はつこうとう じ
 のものです。最新情報ではございませんので、
 まいにしんじょうほう
 あらかじめご了承ください。
 りやうしやう
 「けんぱくものしりシート」は解説員が執筆し
 かいせついん しつぱつ
 ております。



モッチャン



岩手県立博物館
 〒020-0102 岩手県盛岡市上田字松屋敷34
 Tel. 019-661-2831 Fax. 019-665-1214
<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/>